日本福音ルーテル教会　教会史資料編纂委員会ニュース

歴史は語る

2012年6月20日発行　第5号　　編集責任者　青山　勇

日本福音ルーテル教会と東海福音ルーテル教会の合同

岸井　敏（定年教師）

１９６３年に実現した東海福音ルーテル教会（以下東海と略記）と日本福音ルーテル教会（以下日福と略記）の合同総会はその年の5月、東京で開かれました。私は東海出身の人間です。１９５１年の復活祭、当時の文京教会（現小石川教会）で最初の６名の受洗者のうちの一人でした。伝道をはじめたＥＬＣ（福音ルーテル教会）ミッションには、優れた人材が多くいたことが、新たな教会設立に関して、東海には極めて幸いであったと思っています。

小石川教会最初の受洗者（１９５１年）右から３人目、岸井牧師

伝道当初は、もちろんＥＬＣミッションの総会・常議員会の責任で宣教事業が遂行されておりましたが、日本人の自主的な責任による東海の設立に向けての基本的理念が、いろいろな時、いろいろなところで表に表れてきました。

さらに、１９６０年ごろだったと思います。自主教会計画委員会(Indiginous Church Planning Committee) が組織されて、東海が日本人信徒の自主性にもとづく教会運営（自給もふくめて）の方策を追求するための下地が出来上がったのです。この委員会には、ミッションからと、の代表が顔をそろえ、定期的に会合を開くことになりました。

ミッションは、主導権を邦人教会にゆだね、それに協力するものとしての立場にたつべきことを共に目標とすべき歩みが、いち早く始まったのでした。ミッションに頼っていた者に、突然のように自分の責任が問われた時でもありました。

全ルーテル教会の合同が協議されていたのはその頃でした。私はそのための委員ではありませんでしたが、大きなヴィジョンをもって、日本にある全ルーテル教会が、一つの教会、一つの神学校をめざして、国内、国外の総力を結集することは、極めて意義のあることに思われました。私が神学校入学前に学んだ神戸ルーテル聖書学院は、ノールウエーの複数ミッションが経営していたもので、私は東海からの委託学生でした。

私が、日本ルーテル神学校に神学生として入学したとき、私は東海の学生でしたので、ここでも委託学生として、多数を占める日福の学生に混ざっての学びでありました。小さな東海であるだけに、日福の神学生にくらべて将来の働きの場が制限されていることも、さびしいに、全ルーテルの合同への動きに寄せた期待は大きかったのです。もちろんＥＬＣの宣教開始にあたっては、既存のルーテル教会との協力関係を維持すべきことがいわれていたことも伝え聞いて知っていました。

でも、やがて、すこしずつ合同委員会での期待がくずれていきました。各教会、各ミッションの代表が参加しての委員会でしたが、時とともに、不協和音が聞こえ始めました。大きな日福と、東海を含む複数の小さな教会の合同を協議する委員会でした。穏当でないうわさが流れたこともありました。私は委員ではありませんでしたので、誰がどうのということは、全く知りませんが、複数存在する神学校をどうするかも、意見が割れた問題の一つであったときかされましたし、日本の教会と、支援するミッションとの間に、意見のギャップがあった向きもあったと聞きました。ミッションとミッションとの間の温度差もあったと聞きました。大きな期待と共に始まった合同委員会の最後に残ったのは、大きな日福と小さな東海だけになったと最後にきかされたのでした。

そして、その結果の報告が東海の自主教会計画委員会にもたらされました。オラフ・ハンセン先生がその席上で（東海の委員に向かって）発言しました。「決断するのは、君たちだ。残った教会は二つだけになった。それでも合同すると君たちが決断するのなら、われわれミッションは君たちをその道で支援する。もしも君たちが合同しないと決断するのなら、われわれミッションは、君たちをその道で支援する。われわれは、最後まで君たちの友人でありつづける」。

この発言は、私には忘れられない言葉になりました。後に私はLWFのスタッフになって、アジア諸教会の教会建設にかかわる立場になりました。いつでも、どこでも、かかわっていたのが外国ミッションです。私のいわば永遠の課題でありました。

土着の教会は、必ずミッションの意向に従わなければならないのか。意見に沿わなければ、経済的な支援はうちきられなければならないのか。それでも、神学的決断を優先させることはないのか、できないのか。デリケートな、そして永遠の問題でもあるように思われました。一体、土着の教会とミッション、その間の正しいかかわりは何か、決断に至る対話は、どのようにして確保されるのか、財力、人材はいかにして有効に確保され、用いられるのか、大きな神学的課題をつきつけられたのが、1963年でしたし、よきミッションパートナーを持っていたのは東海でした。

合同総会では、新日本福音ルーテル教会が誕生し、議長は旧日福から、副議長は東海から選ばれ、常議員に東海からも人材が入りました。東海は一部の地理的な再編成がおこなわれて、日福の東海教区として発足しました。「全ルーテルの」と言う言葉を失った「合同」でしたが、それはそれなりに、結果は生んでいたと私は評価もし、感謝もしております。

教会合同と宣教力結集

一九六二年へ向けて「ルーテル教会のかたち」を整えた先覚者たちとの出会いから

石田順朗（よしろう）（定年牧師）

本誌名『歴史は語る』に誘発され、「歴史年表に『もしも』はない」の常識を外れて、しばし「歴史的IF」を設定してみた、「もしも1949年以降、中国が共産党支配に移行していなかったならば、戦後再出発したばかりの日本福音ルーテル教会に与（くみ）して、新たにルーテル諸派伝道団体が中国より転進、わが国での宣教協働へと結集することはなかったであろう」と。事実は、宣教上重要な「文書伝道」をいち早く軌道に乗せた「全ルーテル自由協議会」が発足（1950年）、難なく「伝道地域協定」を経て組織合同への機運さえ高まるに及んだ。

折しもその前後（1948年）、鷺宮に再開の決まった神学校を志願して戦後第一陣の入学生（7名）に加わった私は、早速アルバイトの一つに、構内の奥まった宣教師館に単身居住のA・J・スタイワルト宣教師の「走り使い」を始めた。40年も先立つ熊本時代自宅を「路帖神学校」開校の相談の場に提供された先生が、今度は（1950年）戦後のルーテル諸派の伝道協力を目ざして、日本福音ルーテル教会と七つのミッション団体の代表（記録では23名）を招いて懇談会を開かれた際、その準備の手伝いに駆け回ったことを想い起こす。

ついで、その秋「ルーテル文書協会」が設立され、迅速10月には月刊『福音新聞』の発刊となり、その製作発送に関わった青山四郎先生の手伝いを務めることになった。整った原稿を印刷所に届け、時には紙面割り付けまで手伝わされ、刷り上がってきた6000部もの月刊紙の発送は、アルバイトとはいえ大仕事。でもルーテル諸教会、キリスト教関係諸団体や宣教師、とりわけ日本福音の36余の教会への宛書きで、所在地や牧師、宣教師名を暗記するまでになったのはボーナス。

加えて「全ルーテル自由協議会」理事会開催時に届け物や連絡の役目も仰せつかり、一度は昼食に招かれるという特典にも与ったしだい。岸千年、青山四郎先生に並んで、O・ハンセン（理事長）、W・J・ダンカー（副理事長）、W・エルソン（書記）、D・L・ヴィクナー（会計）、S・アスケ、A・ホアース宣教師方との知遇を得たことを追憶し、その後長年に亘ってヨーロッパ、アメリカの各地で様々な交誼を結んだ奇遇を、私は、深い感謝のうちに覚えるものである。

実は（スウェーデン系）アウグスタナ・ルーテル教会派遣のヴィクナー師とは、すでに（1950年）ご夫妻が来日された翌朝、G・オルソン夫婦ほか確か4名の宣教師の方々を連れて、時の総会議長平井清先生牧する都南教会の主日礼拝に出席された折、たまたま通訳をしたことで懇意となり、その午後には、田園調布での家探しに同道もしていた。

その機縁で翌年には「田園調布教会軽井沢夏期聖書学校」の聖書研究指導兼宿泊マネージャーを務めた。開校中、ヴィクナー師がノルウェー系アメリカ・ルーテル教会派遣のオラフ・ハンセン師夫妻を伴って来訪された折、両師が異口同音に「ただ一筋、日本にキリストの福音伝道を！」と情熱を注ぎ、とりわけハンセン師が「ルーテルではなく、キリストの教えを！」と論されたのには全く驚嘆した。

オルソン師夫妻とは、その次の年、未だ荒涼とした広島市街で、ベビーオルガンをリヤカーで運び出しての「夏期伝道」を敢行、はしなくも神学生の身で「山陽部会」の出立に関わらせてもらったのである。

ところで、日本福音と東海福音、両教会合同への私の関与といえば、1962年1月アメリカ留学を終えて帰国、東京学生センター総主事と市ケ谷教会牧師に着任早々、合同折渉の総括期で活躍されていた委員の方々（既述の諸師の他）、河島亀三郎、M・ソーレンソン、田坂淳巳、坪池誠、牛丸省吾郎の先生方や、村井資長、浜田光行、林旦、川西誠の方々から協議の成り行きを伺うだけだった。でもその夏、東海福音の「梅が島キャンプ」に招かれ、O・バーグ師や通訳で活動中の中島誠兄、（後年婦人伝道師となった）大橋孝子姉ほか元気充溢した大勢の青年諸兄姉と起居を共にしたのは、まさに合同序曲として圧巻。

創立総会　会場・救世軍エバンゼリン・ホール（市ヶ谷）

翌63年5月、近隣の「救世軍エバンゼリンホール」で合同創立総会が開催されることになり、その開催準備に礼拝委員として加わり、記念前夜礼拝での説教者W・アンダーセン博士（ドイツ・ノイエンデッテルソー神学校長）の通訳を務めた。引き続き、合同教会の第一回総会までの「運営委員会」の元で、機関紙『るうてる』の編集主筆に指名され、新たな「教区制」で発足した東教区の書記に選ばれた。ただ、程なくスイスのLWF本部からの招請に応じて、翌六四年一月には世界宣教部門アジア担当主事として出向することになり、待望した合同教会への参画が僅か半年だったのは極めて残念なことだった。

ところが、ジュネーブのLWF本部スタッフの一人、世界宣教部協力幹事としてエチオピアの首都に巨大な放送局『ラジオ伝道⊠福音の声⊠RVOG』を創設したばかりのアスケ先生と再会、同僚の誼に又も与ったのには驚いた。先述どおり、1951年、中国より神戸へ転進したノルウェー宣教師団でホーアス師と共にそのリーダー役となり、近畿福音、西日本福音ルーテル両教会形成に寄与された方。四年半のジュネーブ出向を終える直前、先生の計らいでノルウェーに引退帰郷されていたホーアス先生ご夫妻にも懐かしく面談する機会を得た。

日本福音との合同断念の主な理由として、聖書観と神学教育、それに他宗教的生活慣習との対決問題があったことに触れながらも、日本におけるキリスト教伝道に参画して、当初賀川豊彦先生の助言をふまえたり、J・M・T・ウインテル博士を教授に迎えるなど、ただ一途に福音宣教へ情熱を傾倒した神戸一帯での日々を偲ぶお姿には強く心を打たれた。同調するアスケ先生だったが、1974年、東京に「LWFマルチメディア伝道研究所」を開設し、引き続き宣教活動を支援した方々であったことも有り難く記憶に留めている。

「神の救済史に『もしも』はない」ばかりでなく、「わたしたちの目には不思議に見える」数々の出来事に取り囲まれて、つい唱和する、「主の御業はいかに大きく、御計らいはいかに深いでしょう」（詩編118編23節　92編6節）。

合同前の旧日本福音ルーテル教会としての最後の総会　1963年5月2日　救世軍エバンゼリン・ホール（市ヶ谷）

日本福音ルーテル教会と東海福音ルーテル教会との合同それに伴う東海教区発足について

山本　裕（定年教師）

２０１２年１月18日発行『歴史は語る』（第４号）の青田牧師執筆記事から、「A・シルダルの日本視察」の中で『福音ルーテル教会（ＥＬＣ）日本伝道部』は、その当初から日本で伝道していたＵＬＣＡ（北米一致ルーテル教会）との協力関係を基本にしていたことがわかる。

ＥＬＣ日本伝道部が、東海道沿線に精力的な伝道を開始した10年後、１９６０年７月９日・10日、静岡福音ルーテル教会で「東海福音ルーテル教会」設立総会がなされ、宣教師中心の教会から、日本人主体の『東海福音ルーテル教会』が誕生した。私が日本ルーテル神学校を卒業し、名古屋の恵教会に赴任したのが１８６１年４月であるから、まさに「東海福音ルーテル教会」の誕生と、時を同じくして牧師としての歩みが始まったと言ってもよい。

東海福音ルーテル教会解散総会　市ヶ谷学生センター礼拝堂

丁度その頃、10年の歩みを振り返る１冊の本「聖霊の歩み」（１９６０年４月発行）が出版された。その中で初代のオラフ・ハンセン宣教師は次のように書く。『〝私は植え、アポロは水を注いだ。しかし成長させて下さるのは神である（１コリ３：６）〟。東海地方での伝道10周年迎えて、このみ言葉が、私たちの確信を適格に表しています。4名の牧師、73名の任命宣教師、定期に礼拝をしている教会、伝道所27箇所、信徒数は７００人を超えています。

まさに、成長させて下さるのは神〟であります。「だから、愛する兄弟たちよ。堅く立って動かされず、いつも全力を注いで主の業に励みなさい（１コリ15：58）』。

名古屋恵教会の初代タング宣教師が、私に語ったエピソードがある。「私はある日、名古屋南区へ視察に行きました。自転車に乗ってその辺を回っていると、電車通りに面してひとつの空き地がありました。近くに消防署があるのに気づいて、私はそこへ行き、火の見櫓に登らせてほしいと頼みました。望楼から見たその空き地は、後ろは住宅地、前は電車通りであり、多くの人たちが往き来しています。教会にとって最高の場所と思いました。『火の見櫓教会』なんて言うのはどうかな・・なんて、嬉しくなりました」。

さて、先に記した『東海福音ルーテル教会』の出発は、日本における諸ルーテル教会との合同の願いが含まれていた。１９６２年３月の第１回合同準備員会には、日本福音、東海、近畿、オブザーバーとして西日本、日本ルーテル教団の代表が、熊本慈愛園に集まり、合同憲法・規則、創立総会などが話し合われた。時には熱心に、時には疲れを覚えながら10回を数えたが、最終的にはその歩みはひとつにならなかった。細部にわたる話し合いがなされる中で、それぞれの相違が浮き彫りとなり、最終的には、神学校問題があった。

河島亀三郎牧師著の「東海教区20年史」によれば「他のルーテル神学校を卒業した者で、日本福音ルーテル教会の教師を志す者は・・、一定期間、日本ルーテル神学校で研修することとする」。まさに、この項目で象徴される合同への破局である。あれから50年を経た今日、我々はこれら問題から、何を学ぶであろうか。

では『東海福音ルーテル教会』はどうだったのか。『にもかかわらず、我々は合同しよう』であった。合同へのステップは急速に進んだ。１９６５年４月準備委員会は14回で最後となり、そこで、合同憲法規則などが最終提案され、そして５月１日を迎えた。

【日本福音ルーテル教会と東海福音ルーテル教会との協約】

［前文］　日本福音ルーテル教会と東海福音ルーテル教会（以下両教会という）は合同して、新たに日本福音ルーテル教会を形成する。・・

［本文］　教区の形成　（１）日本福音ルーテル教会は、（新）日本福音ルーテル教会にあって３つの教区を形成する。（２）東海福音ルーテル教会は、（新）日本福音ルーテル教会において、そのまま１個の東海教区を形成し、その憲法規則を教区の憲法規則に切り替えて実施する。・・

その他、部会や地区教会の編成替え、行政、財政についての事項など、そして最後に以上の協約事項を互いに承認し、署名捺印して各自保有する。１９６３年５月１日。・・とある。

こうして１９６３年５月２日～４日、東京救世軍エバンゼリンホールで合同創立総会がなされ、「両教会の合同宣言文」が採択され、ここに『新しい日本福音ルーテル教会』が誕生した。そして、東海教区第１回総会が同年７月５日・６日名古屋恵教会で行われた。　なお、これに先立つ４月、名古屋恵教会が、東海教区最初の自給教会となった。新しい教区にとって、神からの〝大きな祝福のプレゼント〟であった。

東海福音ルーテル教会の歴史年表 (1953～1963)

1953	1.5-9	新しい伝道地として、横須賀、浜名湖周辺、刈谷、豊橋の再開発を決定
	1.28	東京都より「宗教法人福音ルーテル教会に本伝道部」認証を受ける
	1	富士伝道開始
	3.29	小鹿教会献堂式
	4	O・ハンセン，神学校教授。聖書学院土地購入(静岡・古庄、1,200坪)
	5.17	半田教会献堂式
	8.21	Rev.J. ボーマン、Rev.G. ギルバートソン、Rev.M. ソーレソンが来任
	9.14	Rev.G. ホーランド、Rev.S. クレムスルード、Miss J. ワァングが到着
	9.20	東京福音ルーテル教会(現・小石川)献堂式
	10.4	全ルーテル自由協議会開催、合同委員会の設置　岡崎教会献堂式
	11.7.	三ケ日伝道開始
	11.8	東海ルーテル聖書学院の鍬入れ式。豊橋で最初の礼拝開始
	11.21	「バイブル・キャンプ」候補地のために静岡・梅ヶ島視察
1954	1.4-8	第三回宣教師会で議長にホーマスタッドを選出
	1.31	板橋伝道開始
	3	横須賀伝道開始
	3.14	刈谷伝道開始
	4	東京・本郷伝道開始
	4.20	東海ルーテル聖書学院開校
	4.25	焼津教会献堂式
	4.29	東海ルーテル聖書学院献堂式
	8.17	ELCより.E. アンセット来任
	8.19	Rev.H. アスランド、Rev.H. アイモン、Rev.N. ニューマン、
		婦人宣教師Miss G. ネルソン、Miss B. サルター、Miss E. タフ来任
	10.23	全ルーテル自由協議会開催
	12.26	沼津教会献堂式
	12.13	合同委員会、教理的一致について協議
	12	静岡ルーテルアワー開設
1955	2.18	婦人宣教師B・ボイヤムとし・.ハンソンが帰米
	3	岸井敏、河島与施夫神学校卒業し、岡崎と富士に赴任
		東海ルーテル聖書学院の第一回生卒業し、各々、伝道師として派遣
	3.14	横須賀伝道を休止決定
	6.16	湯河原伝道開始。
	7.4	「自主教会方策委員会」(Indigenous Church Policy Commitee)発足
	7.12	富士教会献堂式。
	7.19	梅ヶ島バイブルキャンプ場献堂式、第一回キャンプ開催
	8.23	婦人宣教師Miss D. ボナリーとMiss W. ストランドリーが来任
	9	柴田伝道開始(名古屋南区鶴見通り)
	9.18	刈谷教会献堂式
	10.1	婦人宣教師Miss W. アンダーソンとMiss L.ロバーッダールが来任
	10	常滑伝道開始
	10.17～18	京都にて「全ルーテル自由会議」開催
	11	田原伝道開始
	12.6	東京YMCAにて合同委員会開催
1956	1.3～10	第6回年会
	5.5～6	第1回信徒大会(聖書学院にて、85名出席)
	8.12	P. ウァングとRev.I. ファグレが来任
	10.27	豊橋教会献堂式(船原)
	10	静岡、岡崎教会組織成立
	11.6～8	宮島にて「全ルーテル自由会議」開催
1957	1.3～10	第7回年会
	4.27～29	第2回信徒大会(静岡)で、岸井敏と池田政一が最初の按手礼を受ける
	7.1～4	宣教師・教職退修会
	11.5～7	全ルーテル自由協議会(天城山荘)
	11.10	東海地区ルーサーリーグ(聖書学院)
		ルーテル・アワー名古屋センターの静岡分室開所
1958	1.4～10	第8回宣教師会・年会、「東海福音ルーテル教会」組織の予備会議
	5.3～5	第3回信徒大会(聖書学院)、大柴俊和が按手礼を受ける
	9.23	田原会堂献堂式
	11.24	「東海福音ルーテル教会」憲法草案作成作業
1959	1.5～9	第9回年会
	9.12	静岡ひかり幼稚会園舎献堂式
	10.16	ホード総幹事シルダル来日
	11.2～3	東海福音ルーテル教会設立の憲法規則採択、組織準備会議発足
	11.5	伝道十周年記念会(沼津)
1960	1.4～6	第10回年会
	1.18	聖文舎落成式
	1.26	「東海福音ルーテル教会」創設のための第1回準備会
	7.9～10	「東海福音ルーテル教会」組織
1961	5.28	O・ハンセン帰米、セント・ポール神学校教授となる
	6.24～25	第2回総会で日本福音ルーテル教会との合同を決定。
	8.29～31	ALC宣教師会と東海福音ルーテル教会による協約書交換。
	12.12	宣教母体ELCは、ドイツ系ルーテル教会、ノルウェー系、
		デンマーク系ルーテル教会と合同し、ALCを組織する。
1962	4.24	ホード総幹事シルダル来日
	3. 6～7	第一回合同準備会が熊本・慈愛園で開催
	7. 6～8	東海福音ルーテル教会第2回総会(静岡教会)
	12.27	ホード総幹事シルダル辞任
1963	**5.3**	**合同創立総会(4教区制発足)**

合同創立総会（1963年5月）

青田　勇

日本福音ルーテル教会の百年の教会形成の歴史を振り返ると、個々の教会が無関係に発生、発展して地域的な教会群が生まれ、それらが自主的な立場を持ちつつ、連合・連盟関係を結んで教会が組織、形成されたのではない。ルター派としての信仰告白に基づき、明確な宣教目標を持った海外教会の宣教の業によって誕生したルーテル教会が合同を経て、今日の日本福音ルーテル教会を形成したのである。つまり、現在の日本福音ルーテル教会は合同教会そのものである。合同教会としての日本福音ルーテル教会の歩みを歴史的に留めるために、日本福音ルーテル教会と東海福音ルーテル教会による1963年の合同総会にふれておく。

合同創立総会に向けての最終的手続きとなった、日本福音ルーテル教会と東海福音ルーテル教会の最終的協約書が交されたのは1963年5月1日である。その翌日の2日午後3時半から東海福音ルーテル教会は市ヶ谷の学生センター礼拝堂にて臨時の解散総会を開き、日本福音ルーテル教会と合同することを可決した。

救世軍エバンゼリン・ホール（市ヶ谷）

宣教70年を経ていた日本福音ルーテル教会も同様に合同創立総会に先立ち、5月2日夕方までに、最後の総会を救世軍のエバンゼリン・ホールで終えていた。同日、午後7時からは同ホールで礼拝と宗教音楽の集いが催された。説教は世界ルーテル連盟（LWF）に属し、ドイツ人のアンダーセン博士が行った。音楽の夕べは、池宮英才氏を指揮者に、オルガン演奏や独唱など、多数の出演者が奉仕し、合同総会前夜にふさわしいプログラムが設定された。

救世軍のエバンゼリン・ホールは国電中央線市ヶ谷と四谷駅のほぼ中間に位置し、市ヶ谷駅から徒歩で約5分程度、新宿に向った電車の窓から右側に見える白い建物であった。

創立総会はそのエバンゼリン・ホールで翌日の3日（金）午前8時半より午後5時まで行われた。開会礼拝の後、創立総会中の議長とし、山内六郎、書記として大柴俊和が選出され、議事に入った。合同に到った経過報告は、岸千年が日本福音ルーテル教会を代表し、河島亀三郎が旧東海福音ルーテル教会を代表して行った。つづいて、田坂惇巳が内外に向けて、以下のような「合同宣言」を日英両国語で朗読し、拍手により承認した。

「『人の義とされるのは律法の行いによるのではなく、ただキリスト・イエスを信じる信仰による』ことを強く信仰の立場とするルーテル教会は、日本において宣教を開始して以来70年の歳月を経た。日本におけるルーテル教会諸団体は、宣教の歴史の長短はあるが、昭和28年（1953年）より信仰の一致を基礎として合同を目指し接渉を重ねた。そして今日ここに旧日本福音ルーテル教会と東海福音ルーテル教会を形成することとなった。我らの前途にはなお幾多の困難が横たわるとしても、勝利者である生ける復活の主キリストが我らに先立ち導き助けたもうことを固く信じるものである。我らは信仰において、いよいよ団結し、わが教会に与えられた宣教の使命を果たすため、思いをあらたにして、一層努力せんことを決意する。又、わが教会は我らと信仰を一つにし、志を同じうする教会が、われらの群れに加わることを希望する。今、我らは主の栄光のあがめられんことを祈りつつ、溢るる感謝をもってこの合同を国の内外に宣告する。」

こうして、教師数113名、宣教師98名、教会数138を有する日本福音ルーテル教会が誕生した。合同創立総会から1ヶ月を経て、6月、合同教会の機関紙『るうてる』に、合同教会の運営委員長となった岸千年は、「古きは過ぎ去った」と題して、全教会員に合同教会の宣教の方向性を訴えた。

「合同はリフォーメーション（再形成）である。これはルターのリフォーメーション（宗教改革）に通じるのである。ここであらためて、新しい交わりの団体として、主の委託を実践して行かなければならない。それには、古きに死に、新しきに生かされる自覚を信仰のなかでもたなければならない。このとき、全人類のあがないのよきおとずれ、福音の宣教に新しい覚悟と勇気とをもって出で行くことができるのである。生けるみことばへの奉仕が新しい教会のなかでなされるときその結果はいうをまたない。三一の神のみ名がほめたたえられるのである。伝道、教育、社会福祉の各部門にそれぞれの任を受けている兄弟姉妹よ、神の新しい創造を信じて立とうではないか。そうすれば、キリストにおける協力体制が確立せられ、海の彼方にある兄弟たちにむくいることになるのではないだろうか。」